

法華經研究短信(2009)

石田智宏

先に筆者は「法華經の梵語写本 発見・研究史概観」⁽¹⁾を著した。本稿は、その後に発見された法華經の梵語写本や研究情報に関する補遺である。

1. 梵語写本の発見と出版

(1) 写本断片の整理と発見

20世紀初頭に中央アジア各地から出土した法華經写本の多くは、既に研究資料として利用できる状況にあるが、一部未整理の断片が眠っていた。2005年にそのことに気づいた辛嶋静志は大英図書館と協力し、大英図書館所蔵梵語断簡のデジタル化と解説研究を企画した。これは同館所蔵のスタインおよびヘルンレ・コレクションに含まれる、これまで未整理のまま保存されていた中央アジア出土梵語写本文献を整理し、番号をつけなおして、順次解説公開しようとするものである。現在までに、両コレクションの中に新たに約80枚の写本断片が法華經に同定され、一部はローマ字化して出版されている⁽³⁾。またこれに先だって、2004年に10⁽⁴⁾枚、2005年に3枚⁽⁵⁾の中央アジア出土断片が法華經に同定されている。新たに同定された上記の断片の中には、すでに他の機関に所蔵されている断片と同一のフォリオの一部であるものも複数あることが分かった⁽⁶⁾。

以上のスタインおよびヘルンレ・コレクションに含まれる断片には、初期トルキスタン・ブラーフミー乃至南トルキスタン・ブラーフミー文字が使われているため、これらは5～9世紀にまたがる資料であると考えられる⁽⁷⁾。これらは文字通り断片であるものが多く、ほとんどはすでに知られている中央アジア出土写本の別行資料とでもいべき性質のもの

である。しかしこれまで一写本の特例（あるいは写誤）にすぎないと思われていたフレーズの同一部分が新たに回収されることにより、新同定の断片が、先行して知られている資料の補強材料となる点で価値がある。プロジェクトは現在進行中であり、さらに新たな断片が発見されると考えられる。

(2) テキストおよび写真版の出版

先の拙稿で、現在もっとも利用されている梵本校訂本であるケルン・南條本が底本としたネパール写本のローマ字及び影印本出版が待たれると述べた。東洋哲学研究所は、二つのネパール写本、すなわち、上記ケルン・南條本の底本である英国・アイルランド王立アジア協会所蔵写本と、初の現代語訳であるビュルヌフによる仏訳の底本となったパリ・アジア協会所蔵写本のローマ字本を相次いで出版し、続いて大英図書館所蔵（旧大英博物館所蔵）写本の写真版を世に送った。これらの出版はケルン・南條本およびビュルヌフによる仏訳を読む場合に座右に備えるべき資料になるであろう。⁽⁸⁾

2. 翻訳と研究の情報

(1) 現代語訳

法華経の現代語訳は、梵本からの完訳としては、ビュルヌフのフランス語訳（1852）・ケルンの英訳（1884）の後、1998年までの約一世紀の間に数種の和訳が出版された。本稿読者にはそれらは新たな情報ではないと思うので、いまは触れない。その後、1999年にスペイン語訳、2001年にイタリア語訳、2006年にポルトガル語訳（スペイン語訳からの重訳）⁽⁹⁾があいついで出版された。これによって、対象となる読者はヨーロッパのみならず中南米にまで広がったことになる。またもっとも近くは植木雅俊による和訳（2008）⁽¹⁰⁾がある。

漢訳からの現代語訳は数多いが、近年のものとしてはロバール仏訳（1997）、デアク独訳（2007）およびリーヴス英訳（2008）が出版されてい

⁽¹¹⁾る。これら漢訳からの現代西洋語訳は、必ずしも専門家を対象としたものではなく、広く一般読者を予想したものであるが、参考になることが少なくない。

(2) 法華経成立論の新説

ここでは研究に関する情報として、最近発表された特に注意すべき異説を紹介する。

それは法華経の成立に関して『方便品』の散文部分を最古層とする説⁽¹²⁾で、2008年9月の日本印度学仏教学会におけるパネル「法華経解釈学の諸視点」において松本史朗により提出された。それによれば、「梵本による限り、『方便品』散文部分は「一乗＝仏乗」を説くが、菩薩や大乘という語を全く使用していない。これが『法華経』最古層の根本的立場だと思われるが、『譬喩品』ではこの両者が使用され、『舍利弗という声聞も、実は過去世から菩薩行を行じてきた菩薩である』という理解から舍利弗に授記がなされる。これは“菩薩だけが成仏できる”という差別的な大乘の考え方であり、『方便品』の一乗＝仏乗の立場から変化したものである。『方便品』韻文部分にも、この『譬喩品』の考え方が認められるから『譬喩品』散文部分以後の成立と思われる」という。

この所説は、法華経全体の成立史を論じるものではないが、法華経における散文部分と韻文部分との不一致をどう解釈するかという問題と、仏乗と大乘・菩薩乗との関係を如何に理解するかという問題、さらに法華経における菩薩の概念の理解に関する問題とを含んでいる。

第一の問題に関しては、法華経における散文部分と韻文部分との関係が一樣でないことはよく知られている。すなわち、韻文が散文の再説である章とそうでない章があり、また同一の章の中でも韻文が散文の再説である部分とそうでない部分がある。この韻文と散文の内容の相違が生じた理由として成立の先後が考えられ、はじめデュルヌフが経の全体について散文が韻文に先行するとしたのに対し、ケルンは全体として韻文が散文に先行すると主張した。そののち布施浩岳が韻文先行説をとって以来、中村元、岩本裕ほかの学者がこれを支持し、松本文三郎ほか一部

の学者が散文・韻文一体説を主張した。近年では1993年に、成立論を再考して散文と韻文の先後関係を改めて論じた勝呂信静が、韻文が散文の再説でない場合の韻文を散文の補足と考え、全体として散文と韻文の一体成立を主張している。⁽¹³⁾つまりこれまではビュルヌフを例外として、韻文先行説か散文・韻文一体説が主張されてきたわけである。⁽¹⁴⁾

松本説は、これまで一般的であった以上の二説に対して一石を投じるものである。また近年フェッターとナティエは、それぞれ個別に譬喩品の三車火宅の喩に関して散文の先行を推測しているが、この部分については勝呂信静も、「長行（散文）が先で偈（韻文）はそれに基づいたもの」⁽¹⁵⁾（括弧内筆者註）と述べている。ともあれ、部分的であるにせよ散文先行説が複数現れており、今後の法華経成立論はこれらの見解にもこたえるものでなければならない。ただしその際には、これまで行われてきた内容からの考察のみでなく、近年大きな進展がみられる言語学的側面からの検討をも加えて、より確度の高い論証を試みる必要がある。

第二、第三の問題、すなわち仏乗と大乘・菩薩乗との関係、および菩薩の概念の理解については、経全体にかかわる大きな問題であるため、この短信で細部に立ち入ることはできない。ここでは松本説が、法華経における仏乗と大乘・菩薩乗の関係を整理する上で示唆に富む視点であることを指摘するにとどめる。

以上の問題はいずれも、法華経の成立を探求し、その思想を理解する上できわめて重要な課題である。近年、大乘仏教運動に関する研究がおおきく進展し、大乘仏教と部派仏教を対立関係で見ることに対する疑問が提示されるようになってきていることよりすれば、⁽¹⁷⁾「菩薩」や「大乘」の語を持たず、「一仏乗」を標榜する仏教運動を考慮してみるべきかもしれない。梵語写本の分類整理が進み、漢訳の正確な読解のための資料が整ってきた現在、われわれは関連分野の研究成果をも手掛かりとして、既成概念にとらわれずにこれまでの学説を再検討するべき時を迎えているように思われる。

註

- (1) 石田智宏「法華經の梵語写本 発見・研究史概観」『身延山大学東洋文化研究所所報』10, pp.(1) - (28), 身延 2006.
- (2) The British Library Sanskrit Fragments Project. 写真は順次、International Dunhuang Project Interactive Webdatabase (<http://idp.bl.uk/ManuscriptSearch>) に掲載される。
- (3) Klaus Wille, “Some recently identified Sanskrit fragments from the Stein and Hoernle collections in the British Library, London (2),” in: Seishi Karashima and Klaus Wille (eds.), *Buddhist Manuscripts from Central Asia, The British Library Sanskrit Fragments* [=BLSF], Vol. I, pp.27 - 64, The International Research Institute for Advanced Buddhism [=IRIAB], Soka University, Tokyo 2006. Seishi Karashima, “A Sanskrit Fragment of the *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* in the Stein Collection,” in: BLSF vol. I, pp. 173 - 176. Klaus Wille, “Buddhist Sanskrit Sources from Khotan,” in: BLSF vol. II. 1, IRIAB, pp. 25 - 72, Soka University, Tokyo 2009. Ye Shaoyong et al., “The Sanskrit Fragments Or. 15009 in the Hoernle Collection,” in: BLSF vol. II. 1, pp. 105 - 334 (Annotated transcription of this sūtra is made by Ye Shaoyong, Jundo Nagashima, Jiro Hirabayashi and Takamichi Fukita). Seishi Karashima, “The Sanskrit Fragments Or. 15010 in the Hoernle Collection,” in: BLSF vol. II. 1, pp. 335 - 550.
- (4) Klaus Wille, “Some recently identified *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* fragments in the British Library (London),” in: *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* [=ARIRIAB] 7 (創価大学国際仏教学高等研究所年報 [=高研年報] 7), pp. 139 - 146, IRIAB, Soka University (創価大学・国際仏教学高等研究所 [=高研]), Tokyo 2004.
- (5) スタイン・コレクション1断片 (カダリク出土 Kha. i. 123) とヘルンレ・コレクション2断片 (H. 150. vii. 23 & H. 150. vii. 39)、シルクロード南部出土。Klaus Wille, “Some recently identified Sanskrit fragments from the Stein and Hoernle collections in the British Library, London (1),” in:

- ARIRIAB 8 (高研年報 8), pp. 47–80, IRIAB, Soka University (高研), Tokyo 2005.
- (6) Hoernle Or. 15001/11, 12, 14, 25は、現在ベルリンと旅順とにある各1断片と同一のフォリオの一部であることが判明し (Klaus Wille, “Buddhist Sanskrit Sources from Khotan,” p.39)、H. 150. vii. 39はペトロフスキー・コレクションの一葉に接続することが明らかになっている (Klaus Wille, “Some recently identified Sanskrit fragments from the Stein and Hoernle collections in the British Library, London (1),” pp. 71–73.)
- (7) Cf. Lore Sander, “Brāhmī Scripts on the Eastern Silk Roads,” *Studien zur Indologie und Iranistik* 11/12, pp.159–192, 1986; do. , “Auftraggeber, Schreiber und Schreibeigenheiten im Spiegel khotansakischer Handschriften in formaler Brāhmī,” in: P. Kosta (ed.), *Studia Indogermanica et Slavica, Festgabe für Werner Thomas zum 65. Geburtstag*, pp. 533–549, München 1988.
- (8) Haruaki Kotsuki (ed.), *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland (No. 6) Romanized Text* (Lotus Sutra Manuscript Series 7). (小槻晴明編著『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵梵文法華経写本 (No. 6) ローマ字版』(法華経写本シリーズ 7)), Soka Gakkai, Tokyo 2007. do. (ed.), *Manuscrit sanscrit du Sutra du Lotus de la Société asiatique (N2) Texte romanisé* (Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the Société asiatique (No. 2) Romanized Text (Lotus Sutra Manuscript Series 8)). (同『パリ・アジア協会所蔵梵文法華経写本 (No. 2) ローマ字版』(法華経写本シリーズ 8)), Soka Gakkai, Tokyo 2008. *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the British Library (Or. 2204) Facsimile Edition*. (Lotus Sutra Manuscript Series 9) (『大英図書館所蔵梵文法華経写本 (Or. 2204) ——写真版』(法華経写本シリーズ 9)), Soka Gakkai, Tokyo 2009.
- (9) Fernando Tola & Carmen Dragonetti (trs.), *El Sutra del Loto: de la verdadera doctrina Saddharmapuṇḍarikasūtra*, México (El Colegio de México) / Africa (Centro Estudios de Asia y África) 1999. Luciana Meazza (tr.), *Sutra del Loto* (Biblioteca Universale Rizzoli), Milano 2001. Carlos Alberto da

- Fonseca (tr. from Sp. tr. by F. Tola & C. Dragonetti), *Sūtra do Lotus: Da Verdadeira Doctrina: Saddharmapūṇḍarikasūtra*, Primordia, New Jersey 2006.
- (10) 植木雅俊 (訳) 『梵漢対照・現代語訳法華経』上・下、岩波書店 2008。
- (11) Jean-Noel Robert (tr.), *Le Sutra du Lotus*, Fayard, Paris 1997; Max Deeg (tr.), *Das Lotos Sutra*, Primus Verlag, Darmstadt 2007; Gene Reeves (tr.), *The Lotus Sutra*, Wisdom Publications, Boston 2008. なおドイツ語の初訳は Margareta von Borsig (tr.), *Lotos Sūtra, Sūtra von der Lotosblume des wunderbaren Gesetzes*. Verlag Lambert Schneider, Gerlingen 1992である。この他に Watson (tr.), *The Lotus Sutra*, Columbia University, New York 1993からの仏訳として Sylvie Sevrans-Schreiber and Marc Albert (trs.), *Le Sutra du Lotus*, Les Indes savants, Paris 2007がある。また現在、Silvio Vita によるイタリア語訳が出版準備中であるという。
- (12) 「第59回学術大会パネル発表報告 法華経解釈学の諸視点 代表 久保継成 1. 『法華経』の形成に関する一視点: 松本史朗 『印度学仏教学研究』57-2, 2009. 3, p.(305) および学会当日の配布資料参照。詳細は「〈法華経〉の思想〈方便品〉と〈譬喩品〉」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』28, pp.1-27, 東京 1995 に基づいている。
- (13) 勝呂信静 『法華経の成立と思想』 pp.97-130, 391-426, 大東出版社, 東京 1993.
- (14) 散文と韻文の先後のほか、法華経の成立論に関する諸説の要点をまとめたものに、伊藤瑞毅 『法華経成立論史』平楽寺書店、京都 2007 がある。
- (15) Tilmann Vetter, “Hendrik Kern and the Lotussūtra,” ARIRIAB 2 (高研年報 2), p.131, Tokyo 1999; Jan Nattier, “Becoming a Sūtra: How Mahāyāna Literature Began.” The handout of the IABS conference in Atlanta, 26, p.3, June 2008.
- (16) 勝呂前掲書 p.118. 同書は、法華経の他の部分、たとえば方便品の五千起去の段について「長行の後にそれに引きつづいて偈が作成されたと見るのが妥当ではあるまいか」(同書 p.115) とし、五百弟子品の衣裏宝珠喩の段についても「長行の方が先であると考えざるを得ない」(同書 p.116) とするが、力点は偈の先行説を否定することであり、執筆の順序と

して長行が先の同時成立を考えている（同書 pp. 123-130）。

- (17) 佐々木閑「部派仏教の概念に関するいささか奇妙な提言」『櫻部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』, pp. 57-71, 平楽寺書店, 京都 2002. 近年の大乘仏教全般に関する研究動向に関しては、*ACTA ASIATICA, BULLETIN OF THE INSTITUTE OF EASTERN CULTURE* 96: Mahāyāna Buddhism: Its Origins and Reality, The Toho Gakkai, Tokyo 2009 を参照。